

◆【海員随想】神戸港の一枚の絵 海員OB 野平陽一

今日は、まことに懐かしい物が見つかった。家内に婚前に出した古い手紙の束である。

これと同時に神戸港の古い油絵である。妻への古証文みたいな手紙は、金婚式で余興に子どもにチラッと見せることにして、とにかく神戸港の絵が見つかったのはうれしい。神戸メリケン波止場、あのサンパンが出た栈橋である。

絵の中には神戸通船が2隻並んで舳い、右方沖合には川崎造船所のガントリークレーンが、そして港内のブイに係留する大型貨物船2隻が描かれている。

この絵は、昭和34年に私が神戸長田の明泉寺の寮から明石の人丸に転居した折、神戸支部長だった釈氏弥一郎さんに贈っていただいた思い出の深い絵である。あれから50年近い歳月が流れた。

15年前に組合を定年退職するまで、神戸支部を振り出しに川崎支部、本部汽船部、神戸地方支部、本部組織局、東京地方支部と転勤し、組織内で暴れすぎて同盟に放り出され、最後は和歌山支部長。そして和歌山から現在の新宮まで、この間に9回ほど転居してきたが、神戸の絵は額を外したまま、生涯の友人というような顔をして一緒に転居してきた。この絵は私がたどってきた道をいろいろと思い出させてくれる。

昭和19年8月に、初めて船員として大阪商船の慶運丸に乗船した。

片っ端から米潜の雷撃で葬られる日本商船隊の中で、慶運丸は何度も危機を切り抜けてきたが、沖縄から最後の引き揚げ輸送に当たった20年2月末以後は、南西諸島へのラインは米軍の制海権下に陥り、釜山を窓口にしたルートが唯一となっていた。

この最期のルートで、本船は米軍機の空襲により、5月15日に壱岐の北東で撃沈された。

この遭難のことで書き添えたいのは、自分の乗っていた船が沈没する一部始終をボートで観察できたこと。多くの戦没船歴の中でも、珍しいケースだと思う。

映画「タイタニック」で沈没のシーンがあるが、慶運丸は至近弾により船尾をやられたため、浸水は船尾から始まり、船首を竿立ちにして海没した。傾くに連れデッキのあらゆる物が、ラッシングがふち切れて落下してゆく、すさまじい光景である。

さらに、何かにラインがかかり、だれかが引いたように汽笛が弔笛となって鳴り響いたことである。

ボーイ長として、また航海中は聴音器の聴取員として、前年の8月から乗ってきた本船との決別であった。脳裏に深く焼きついているのか、60年経った今でも時折遭難の夢を見る。

当時14歳の私が船乗りとして成人し、そして昭和29年に執行部に上がり、組合運動の端くれを歩いてきた。

この人生を語り、そして貧しかった若い時代を知る仲間の多くは、幽玄の彼方に逝かれ、周囲が寂寞となってきた。

「海員だより」